

出来ない時は出来ないんだよ。  
無理しないのが秘訣。



## 温井村づくり委員会 代表 村山由美子さん 副代表 宮崎 美和子さん

温井村づくり委員会の代表、村山由美子さん(写真左)は、「村を元気にしたい」という一心で野菜の直売所やカフェ「ギャルリかざはな」の運営など、様々な活動を行っている女性イノベーターだ。そして村山さんを支え一緒に活動を行ってきた、副代表の宮崎さんは、市長の秘書を務めていた経験のある女性である。今回この相棒のような二人にどのようにして、温井で活動を続けてきたのかインタビューをした。

### 村づくり委員会

#### おとしよからおんなしよへ

村山さんと宮崎さんが活動を始めるきっかけになった「村づくり委員会」は平成七年から始まった飯山市の政策で、まちづくりの活動を助成する制度であった。温井でも村づくり委員会ができ、村の男性たち「おとしよ」が代々関わっていたようだ。当初、男性達は週一回、翁そぼという蕎麦屋を出して評判にもなったが、三、四年で店を閉じるようになってしまったという。十二年間男性達が活動していたが、何をやったら良いかわからないという状況になっていたと村山さんと宮崎さんは語る。そうして、おんなしよ(女性達)に任せるという形で転がってきたのだ。

### 村山さんが会長に

最初、宮崎さんが二年間会長を務めていた。区

の総会で任命された宮崎さん。「何をやっていいかわからなくて、もう右往左往して。そうしたらこの人(村山さん)が勝手に好きなこと始めてたの。(笑)」と宮崎さん。村山さんは、掘っ立て小屋で個人的に野菜の直売所を始めていたのだという。「人聞き悪いなあ〜そんな(笑)」と笑う村山さんだが、「わたしがやりたい!死ぬまで一生懸命やりますから」と立候補したのだそう。「私は死ぬまでやりますって、そんなこと言う人いる?区の総会ほとんど男衆しかいないのにすごいと思わない?」と宮崎さん。村山さんは、既に立ち上げていた直売所を形にしたい。村を元気にしたいという一心、だったのだ。

### 村山さんの十年間の活動 「直売所」

会費を払う訳ではなく、自分で値段つけて誰でも出荷できる「村の」直売所。村山さんはなぜこの直売所を始めようと思ったのか、「この野菜がすごくおいしいのに、みんな家庭で作って食べられないと捨てちゃうんだよ。それが勿体無いという事で、これを例えわずかでも売れば、出す人も元気になる。それで始めたんだよね。」と村山さんは語る。さらに、温井に訪れる都会の人達に味わってもらいたいというのが基本にあったのだそう。掘っ建て小屋から始まった直売所は三年間、村山さんと協力してくれるおばあちゃん達の力によって続けられ、それが二一年以降村づくり委員

会で仕事になり、二二年に、元気づくり支援金を申請して小屋を建てるまでに至ったのだ。

## 苔玉、藁細工の制作

野菜だけではなく、通年で売れるプラスチックの仕事を始めると良いという飯山市からのアドバイスから、温井の宝物を活用した何かを売ろうと、新たな活動が始まった。当時、木島平村の下高井農林高校で、鍋倉山に残る巨木「森太郎」の苔玉を「森彦」という名前で作っていたのだそう。それを村山さん達は教わり、事業に加えることになった。さらに、苔玉作りを教えてくださいました教員から、「温井なら、藁がある。藁細工をやったらどうか」というアドバイスをもらい、自分たちで様々なものを作り始めたのだ。最初の模索していた頃は村のほとんどの人が参加していたそう。しかし、今は既製品になったため器用な人でなければできなくなりました。「直売所は村のほとんどの人



が来ているし、一年を通せば大概の人は何かやってくれている。」と村山さんは語る。藁細工を作らないそれ以外の人も直売所に関わっているのだ。

「やっぱり村の中って得意分野があるんだよね。だから一つに絞っちゃうと、それできない人はどうするってなる」と宮崎さん。この発想から、一年を通してみんなが参加できる場所を目標に今まで進めてきたのだそう。さらに、村でお茶飲みをすると、手先が器用な人や縫い物が上手な人などがわかるという。村人の得意分野を発表できる機会がなければ、そこで終わってしまい、村づくりに生かせない。お茶のみは重要な場なのだ。藁細工は年の試行錯誤を経て、今の鶴や亀の形になり、飯山市が認めるお土産となった。藁細工の包装の印刷やその文字なども、大勢の人が関わっている。藁細工はこの村の中で出来ているのだ。

## カフェ ギャルリかざはな

この岡山地区で一軒だけのお寺であった、インタビューを行ったこの建物。宮崎さんが子どもの頃は施設保育園で、実際に通っていたのだそう。そして平成十八年に林野庁による補助金で、村づくり委員会が協力して改修された。寺の持ち主から、「せっかく直したのに誰も使わなくて困る。なんとか使ってほしい」と言われ、2014年に元気づくり支援金を申請して、2015年に保健所にも許可をもらってカフェをスタートさせたのだ。昔は第四日曜に営業していたが、現在は予約

制。「ここがせっかく使えるようになってから、ずっとやってくれる人がいれなくなって思っている。」と村山さん。移住者の人々にも声をかけているのだそう。「いつもここが使われている感じがわかるといいよね。」と宮崎さん。区民は無料、区民以外の料金も決まっています、誰にでも開放しているそう。今後、演奏会などなんらかの形で使ってもらいたいと考えているそうだ。

## 長く続ける秘訣、温井への思い

様々な活動を継続してきた村山さんと宮崎さん。長く続ける秘訣はどこにあるのか。「焦ってもだめ、無理なこととしてはだめ。自然の流れに任せて、出来ない時は出来ないんだよ。無理しないのが秘訣。楽しくなきゃダメなんだよね。」と村山さんは語る。さらに「やっぱり村っていうものを大事にしたいんだよね。この村をそんなに観光的にしたくないっていうか、この村を大事にして明るく楽しく生きてるっていう村の良さをみんなに知ってほしい。」と村山さんは語る。お金儲けをしようとして、観光客が沢山来てしまったらいい温井ではなくなくなってしまおう。「小銭稼ぎでいいんだよ。みんな中心があって、プラスチックアツて感じで」と村山さん。直売所に野菜を持っていくのが楽しみだというおばあさんもいるそう。大それたことはできなくても、拠点になる場所があれば楽しいし小銭も稼げる。そこに色々な人が集まってくる、拠点がら全てが始まるのだ。

## 相棒 村山さんと宮崎さん

「この人は突き進むでしょ？(笑)それで物事をね、とても楽観的に考えてるから、この人はスイスイ先に行っちゃうんだよ。だから私にとっては良かったと思う。出会えて」と宮崎さん。「この人(宮崎さん)がいるからちゃんと質問されても答えられる。ちゃんとしているのはこの人なの。優秀さがあるから！うまく組み合わせたの。」と村山さん。この対照的な村山さんと宮崎さんが組み合わせたからこそ、長く活動を続けてこれたのかもしれない。二人は相棒のような存在なのだ。

